

第41回 - 生駒山地を巡る 3) 河内湖の変遷 -

奈良北部から生駒山地を西に越えるルートに清滝峠がある。現在は清滝トンネルが開通し、国道163号を東から来る車は、ほとんどトンネルを通り四条畷の中心部へと直線的に下っていくが、「遊ぼう連」の我々は清滝峠への旧道に入った。曲がりくねってはいるが旧道は寂れておらず、ゴルフ場があって峠の集落は豊かな構えであり、また河内平野・大阪市の眺望は素晴らしいものであった。国道の長い下り坂の半ばに合流、更に下って左折し東高野街道に降りて、目的地の四条畷市立歴史民俗資料館を訪れた。

土蔵づくりの建物を入ると、入り口右手に「河内平野の成り立ち」の点灯式模型案内地図が置いてある。

(図1.河内平野の発達) 縄文時代前期前半(約6000年前)に、地球温暖化により海面が上昇する「縄文海進」のため、現在より海面が5～7m高かった。そのことは地質調査や貝塚の分布調査などで明らかである。その当時日本列島の現在の

平野はほとんどが海底であったといわれるが、その判りやすい例として河内平野がある。今問題の、二酸化炭素を原因とする地球温暖化の結果起こる海面の上昇や、南海大地震による津波によって、海没が予想されているのは図1に示されている縄文時代の赤線に区切られた地域である。縄文海進期が終わって気温は下がり始め、それに伴い南北極など地球各地で氷河や氷床が形成され、そのために海水面は次第に数メートル低下して現在に至っている。最初は海であった河内湾は、海水の流入が次第に減少して汽水の潟となり、河川の流入・土砂の堆積もありついに河内湖となった。東に生駒山地、西に湖が広がるこの地は、西から瀬戸内海を渡ってくる海人の目標「太陽の出る山の麓」、草香江と名付けられた。

讚良川流域の更長岡山遺跡(縄文)からは、豊かな生活を思わせる大量の土器や石器、祭祀用の道具などが出土している。その少し下流の讚良郡条里遺跡から出土した弥生式土器・炭化米を放射性炭素年代測定法で測定したところ「2500年以上前」の結果が得られている。さらに、南東1.5キロほどに雁屋遺跡があるが、ここは弥生中期の頃には大集落となっていた。

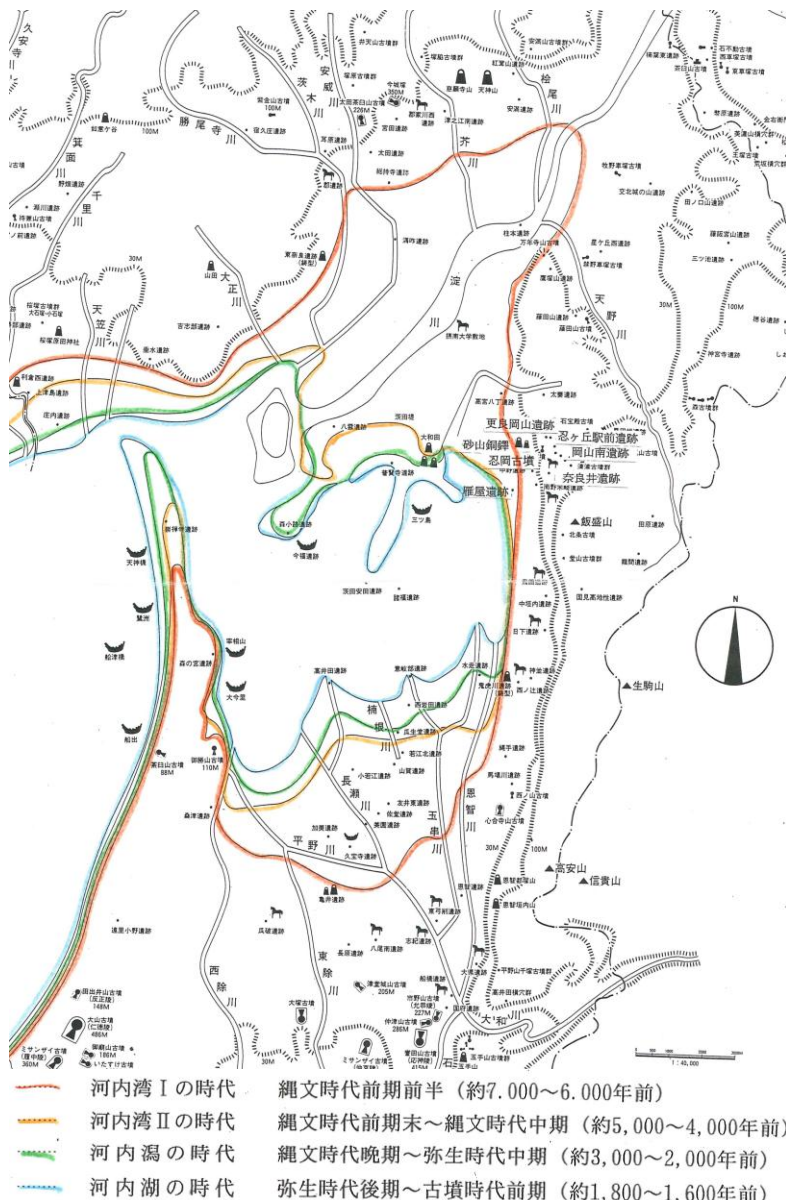


図1. 河内平野の発達

さて、古墳時代の中頃となると、この地に朝鮮半島から渡来人が次つぎに到来し、様々な最新の技術を伝えた。なかでも、渡来人のもたらした馬と、その初期の飼育がここで行われたことは重要である。四条畷市立歴史民族資料館は開館30周年記念事業として、そのあたりに焦点をあて特別展「継体天皇と河内の馬飼ひ」(2015.10.6~12.13)を開催した。大阪周辺の遺跡から出土した馬に係わる資料、今城塚古墳の出土品、高島歴史民俗資料館と若狭町歴史文化館からの王冠や馬具等が集められて、展示された。

日本書紀には、応神天皇15年（5世紀前半）、百済から良馬2匹（古事記：牡・牝）が贈られてきて、大和の厩坂で飼育したと記されてある。その後、馬の飼育は幾多の困難を克服し、この地の讃良の牧において順調に進展した。その牧は図1で馬形の印がある、生駒山地の山裾、東西約2キロ、四条畷から寝屋川までの南北約3キロの範囲である。馬は体高125センチ前後の蒙古系の馬で、この血統の馬は現在も木曽・開田高原の牧場で飼育保存されている。牧から百済の栄山江流域の土器が出土することから、馬の飼育は百済人があたっていたと推定されている。この牧は日当たりの良い斜面で、栄養価の高い牧草が繁茂し、湖や川は自然の柵となっていた。讃良の牧における飼育の実態や馬飼の里の暮らし、祈りや祭りなどはこの資料館の常設展示で知ることが出来る。

[illegible]

この放牧地は広さに限度があり、より大規模な適地へと馬の飼育は移行し、讃良の牧はやがてその役割を終えることとなる。馬の飼育は列島に広がって、ついには百済に馬を送る様にもなったという。そして、そのまゝにヲホド王（継体）の登場がある。越前・三国を本拠としていたヲホド王は日本海から琵琶湖・淀川水系の舟運を抑えていた。当然のことながら彼は以前から、淀川の河口につながる河内湖とその沿岸部の首長・河内馬飼首荒籠と親交を結んでいた。河内湖周辺を図2に示すが、このころにはすでに難波の堀江は開通、淀川治水の茨田の堤も完成していた。

(岡野 実)

- 2 -